

令和4年度海老名市中学生 人権作文・ポスター優秀作品集



市長賞 柏ヶ谷中学校 三年
後藤 来実

海 老 名 市
海老名市人権擁護委員会

は し が き

海老名市人権擁護委員会は、人権思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、次代を担う多くの中学生の皆さんに、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づいた作文を書くこと、またポスターを描くことを通じて、人権尊重の必要性・重要性について理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として、毎年人権作文及び人権ポスターを募集しております。

令和四年度は、市内の中学校から、四百九十五編の作文、五点のポスターを応募いただきました。いずれの作文、ポスターも中学生らしい純粋な感覚で物事をとらえ、人権の重要性について真剣に考えていこうという意欲が伺えるものばかりでした。この作品集は、入選した十四編、三作品を収録しております。一人でも多くの方に読んでいただき、人権尊重の精神が更に大きく広がる事を願ってやみません。

令和四年十二月

目次

◆ 作文部門

市長賞

左手にある私の証
クロックポジションを知っていますか



海老名中学校 二年 張 絢音
海西中学校 三年 関 あみ

…
1

優秀賞

「個性Ⅱ違い」
「自分らしく」
きつと世界はひとつになるんだ
「生きづらさ」
「人権の守り方って難しい」
差別と理解
「常識」と「自分らしさ」
人権を侵すネット投稿

海老名中学校 二年 大田 璃乃花
海老名中学校 二年 羽曾部 桃
海老名中学校 二年 吉村 綾真
海西中学校 三年 宇土澤 美砂
海西中学校 三年 大山 琴
柏ヶ谷中学校 匿名
柏ヶ谷中学校 匿名
柏ヶ谷中学校 匿名

…
6
…
8
…
10
…
12
…
14
…
16
…
18
…
20

「顔を見て、言える？」
変わらないまま
「自分を愛する権利がある。」
ごめんねお兄ちゃん

◆ポスター部門



今泉中学校	三年	石原	綾花	∴
今泉中学校	三年	島仲	琉璃	∴
今泉中学校	三年	村山	りく	∴
今泉中学校	三年	横溝	希空	∴

市長賞

ネットの書き込み

柏ヶ谷中学校	三年	後藤	来実	∴
--------	----	----	----	---

優秀賞

肌の色
いじめから

柏ヶ谷中学校	三年	浦井	かつろ	∴
柏ヶ谷中学校	三年	藤本	葵衣	∴

◆
作文部門



市長賞

左手にある私の証

海老名中学校 二年 張 絢音

みんなどこかにその人の証がある。そして、私は左手の甲にその証がある。その事に気づかせてくれたのは母の一言だった。

私は左の手の甲にあざがある。生まれつきだ。小学生の頃、そのあざはよく、

「やっぱりそのあざ、変だよね。」

「タトウーみたい。」

などと言われ、からかいの対象になっていた。言っている側は冗談のつもりだったのかもしれない。しかし、その一つ一つの言葉を聞くと、私は自分の左手が周囲の子たちとは違う事を自覚させられ、それは確実に私の心を傷つけていった。いつしか私はあざのない左手にあらがれるようになり、自分の左手を嫌うようになっていった。

この「嫌い」という気持ちが決定的になったのはある日の休み時間だった。この日もいつも通りに同級生達と話して時間をすごそうと思っていた。いつも通りに

「話にいれて。」

と声をかけた。しかし、同級生達はいつも通りではなかった。

「今は左手にあざのない子達で遊びたい気分なの。左手にあざのあるあなたはダメ。」

と答えたのだ。答えた子以外はクスクスと笑っていた。

私がこれは生まれつきのものだと言明しても、手を洗ってこいと笑うばかりで一生懸命に説明する私を相手にしてくれなかった。私はからかわれているのだと理解した。

からかわれる事は日常茶飯事だから慣れている。しかし、その時はなぜか笑えなかった。頭が真っ白になり、ただ、なんでなんで、という言葉が頭の中で反復されていた。

「なんで仲間にいれてくれないの？なんで左手にあざがあるだけでそんな事をするの？」と。その後の事はよく覚えていない。悲しさ、怒り、そういつた感情が頭を支配し、それ以外の事について考えられるほどの余裕を当時の私は持っていなかったのだ。気がついたら学校が終わった事を告げるチャイムが鳴っており、その瞬間、私は感情にまかせて家に向かって走っていた。

深呼吸をしながら家のドアを開けると、まず最初にお母さんがいる。それだけの当たり前な事でも、当時の私が安心して、涙を流すには十分な理由だった。母はそ

んな私を見て何かを察したのか、わざわざ仕事を中断し、「どうしたの。」

と聞いてくれた。とても優しい声だった。いつも真顔でしようもない冗談を言ってくる母の姿が、その時はとても大きく見えた。私は時に言葉をつまらせながらゆつくり話し始めた。今まで左手をからかわれ続けていたこと。笑っていたけれど、本当はとても辛かったこと。このあざはそんなにおかしいのかということ。今までためこんできた辛い気持ちと共にたくさんの事を話した。母は私の支離滅裂な話を最後まで静かにうなずきながら聞いてくれた。話しを聞いた後、母は私をたくさん励まし、共感してくれた。そして、私のあざを、「それはあなたにしかないあなたの証なの。くらべるものじゃない。」

と言ってくれた。私は、自分の嫌っていた左手のあざをそんな風に言ってもらえた事が本当に嬉しかった。このあざは決して恥じるものではない。これは私の、私だけの証なのだ。自信をもてた。その日、私は自分の思っている事を周りの子に言おうと決めた。

今、世界には約七十九億人の人がいる。その中には、身長の高い人、金髪の人、肌が黒い人、生まれつき目が見えない人、そして、私のように生まれつき体のどこかにあざがある人など様々な人がいる。それはその人の証

で、「自分らしさ」である。だから決して恥じる事はないし、差別をされてはならない。自分らしさを大事にして誇りに思うのは、世界中の人々が共通してもっている大切な権利だ。しかし、今の社会では、その権利をないがしろにされて苦しんでいる人々がいるのも事実だ。最も怖いのは、たくさんの人々がそれを無意識にやっつけてしまっている事だ。そのような事が起こるのは、自分の持っている自分らしさが「当たり前」であると思いつみ、無理矢理他人に当てはめ、当てはまらない人は否定する。この一連の流れが原因だと思う。この流れを断ち切るために、視野を広げ、この世界には様々な人がいるという事を知ること、自分の「当たり前」という視点を見直すべきではないか。そうして見つけた自分らしさは、約七十九億種類の中の一つの一種類であり、唯一つの証なのだ。

当たり前という概念がない社会。自分らしさを互いに認め合い、尊重し合える社会。少しでもそんな風に変われば、きっと明日はもっと楽しくなる。

市長賞

クロックポジションを知っていますか

海西中学校 三年 関 あみ

「ポテトは三時のところに置いてあります。ケチャップは九時のところに置いてありますよ。」

これは何のことだか分かりませんが。視覚障がい者の方に食べ物がどこに置いてあるのかをお知らせするクロックポジションというものです。そして母の友人で視覚障がい者でマッサージの先生をしている方がいます。小さい頃から一緒にご飯を食べに行っていたため聞き慣れた言葉でしたが、はじめての人には何を言っているのだろうと思うことかもしれません。先日、一緒にご飯を食べに行く時、母に、

「車の向きを変えておくから先生を迎えに行ってきた」と言われました。母がやっている姿を見ていたので私も出来るだろうと思っていました。しかし、それがなかなか大変でした。分かっていたつもりなのに私は先生と腕を組んでしまいました。すると先生が苦笑いし、「あみちゃんの一の腕あたりをつかませてもらえるかな。」

と言われ気付きました。階段が始まる時には大体何段あるのかを伝え、階段が終わる時には、

「階段があと一段で終わりますよ。」

と声をかけないともう一度踏んでしまいます。段差のところでは一度立ち止まり、

「意外と高い段差があります。」

などと伝え、白杖で確認してもらいます。細い道を通る時には、

「道が狭いので一列になって進みます。」

と伝えます。一列になれない時（駐車場など）には、

「めちゃくちゃ狭いので、かにさん歩きでいきます。」

と言って横歩きをしてもらいます。何度も何度も一緒に出かけていても一緒に歩いたことはなかったので百聞は一見にしかず、体験や実践をすることが大切だと感じました。また言葉にして伝えることの難しさも、とっても感じました。

「今ハマっていることは何？」

と先生に聞かれたので、私は小説を読むのが好きだと伝えると、先生も小説が好きであると話してください、私が今読んでいる本の話をしました。先生と別れてから母に先生はどうやって本を読んでいるのかと質問してみました。視覚障がい者の為に神奈川県には、ライトセンターというのがあり、ボランティアさん達が本を読んでく

れて、そのCDの貸し出しで聴いているとのことでした。それなら私にも出来るかもしれないと思い、私はまず自分が読んでいる本のあらすじを携帯に録音し、先生に送りました。先生はとても喜んでくださり、

「話し方もスピードもとっても良いよ。」

と褒めてくれました。なんだか私はとっても嬉しく心が温かくなりました。人権というと「私たちに人権を！」と戦うイメージがあります。今はジェンダーレスの時代など考えさせられることが、たくさんあると思います。

私は「他者を認める。」これが今の日本のテーマだと思っています。この体験を通し他者を認め、自分達が他者に協力出来ることを考えていく。これを身に付けることが大事だと感じました。また、世の中の人達は何かお手伝いをしたいという気持ちを持っている人は、たくさんいると思います。ただ、どうやって関わっていけばいいか、ということが分からないので、なかなか踏み出せないのだと思います。私も実際にお話しをして体験をしてみたからこそ、次に自分が何をできるか考えられたのだと思います。視覚障がいの方が、どのように歩いているのかなど体験するキットがあるそうです。そして介助側も体験させてくれる、視覚障がい者をバックアップするボランティア団体が企画していると、母が教えてくれました。例えば小学校、中学校、高校で道徳な

どの時間を使い理解を深める体験学習や障がい者の方のお話しを聞く、という授業を行っていくことで、街で出会ったときに声をかけやすくなるのではないかな、と感じました。共存共栄の為に私達が理解を深めていくことが大事であり、人権を守っていくということになるのではないのでしょうか。私は早速、短編小説を購入し、先生に聞いてもらいたいと思っています。まずは小さな一歩から頑張っていきたいと思っています。



優秀賞

「個性≡違い」

海老名中学校 二年 大田 璃乃花

人生で一度は聞いたことある言葉。それは、
「みんな違ってみんないい。」

と言う言葉だ。私がこの言葉についてよく考えられるようになったのはつい最近だ。それまでの私は、自分とは違うことをうまく受け入れることができなかった。

小学生の頃、私は水泳を習っていて、いつものように練習をしにいくと、知らない女の子がいた。新しいチームメイトだった。新しいチームメイトということもあり、最初はみんな話しかけたりしていた。新しいチームメイトがきてしばらくたった頃。いつものように会話をしていると一人の子が新しいチームメイトの悪口を言い出した。新しいチームメイトの子は、少し気が強く、きつい口調になってしまいう時があり、私も苦手意識を持ってしまっていて、悪口を否定することができなかった。そんな話をした後、私の考え方を変えるできごとがあった。またいつものように練習をしにいくと、新しいチームメイトの子が泣いていた。最初は何で泣いているのかわか

らず、困惑していると、コーチが事情を説明してくれた。新しいチームメイトは、気が強く、みんなからの苦手意識もわかっていたらしく、うまくなじめなく不安だったそう。そんなことも考えず、初めから苦手意識を持って接してしまったことがとても心に残った。その後、新しいチームメイトともう一度話し合いうちとけあうことができた。私は、一つの情報だけで勝手に苦手だと判断してしまった。でも、話してみてもわかることや、その人の良いところがみつければ、相手の苦手な部分もそうではなくなるのかもしれない。自分の何気ない行動で、相手を深く傷つけてしまっていたかもしれない。言動や行動、自分にとっては軽いものであっても、相手にとってはとても重いものになってしまう。だからこそ、認められる力や相手のことを思う力というのはとても難しいことだと実感した。

今回のできごとを通して、私は相手を思う言動や行動がいかに大切でみんなそれぞれの思い、考え方があり、それを認める力というのはとても大切なことだと思えることができた。

「みんな違ってみんないい。」

この言葉は私にとって、生きていくための中でとても重要なことであり、この言葉のように本心で思えることができたとき、自分も周りも暮しやすい環境を作ることが

できるのではないかと私は思った。今の時代、SNSの影響がとて大きい中で、問題になっている「誹謗中傷」や「いじめ」などによる被害がある。そんな中でも互いに認め合い、相手の悪い部分を見るのではなく、良いところを探してみたり、人それぞれ良さがあるといった考えをもって、色んな人たちと出会い、共に過ごしていくと、生きやすい世の中になると私は思う。この先、生きていけば、最高の親友や自分を好いてくれる人、理不尽な人や自分のことを嫌ってくる人、どんな人に会うかはわからない。どんな人に会っても、最初に苦手意識を持つのではなく、相手の良いところを見て接してみる。接していく中でも、苦手だと思ふこともきつとあるだろう。それでも、それはその人と自分自身との「違い」であり、個性だと思って接していきたい。



優秀賞

「自分らしく」

海老名中学校 二年 羽曾部 桃

私はこの世界におかしいことはいくつもあると思えます。男女差別もその一つだと私は考えます。

私は幼い頃から「男の子っぽい」ことが好きでした。私には兄がいて、いつも一緒に過ごしていたので、仮面ライダーや戦隊ヒーロー、様々なゲームをすることが大好きでした。そんなある日、私は友達に

「桃ちゃんって男の子っぽいよね。」

そう言われました。当時はあまり気にしていませんでしたが、次第に周りの女の子の友達と話が合わなくなった。男の子と話している方が、話があって楽しかったりと、私って変なのかなと思うようになっていきました。そうして、とうとう自分の気持ちや、好きなことが分からなくなってしまう、母に相談しました。私は女の子っぽい趣味を見つけないさい、と言われると思っていたので返ってきた言葉にとても驚きました。

「桃は、桃のままでもいいんだよ。」

母はそう言ったのです。それを言われて私は、はっとし

ました。周りからの言葉なんて関係ない。私は私なりに、自分らしく生きていけばいいんだと、そのときから思えるようになりました。それから、男の子っぽいと言われても気にせず、むしろ私らしさをほめられていると、前向きに考えることができるようになりました。

そんな私ですが、今の時代、様々な差別をなくしていいこうという考え方から、ときどき男女差別について自分で考えたりもしています。つい最近、私の通う中学校では、男女関係なく自分で自由に制服を選択できるようになりました。そこで私は思いました。なぜ女子はスカートもズボンもはくのに、男子はスカートをはかないのだろう。調べてみると、大昔は男子も女子も、みんなスカートのような洋服を着ていたそうです。男子は馬にのりやすいよう、だんだんズボンをはくようになり、それが定着していったことで、スカートをはかなくなり、今に至ると分かりました。しかし、だからといって男子、女子を決めつけてそれぞれが自分らしい、好きな格好をできないのは違うのではないかと私は思います。また、この間、男女差別について考えるテレビ番組をみました。そのとき、男子は青や水色、女子は赤やピンク色といったイメージが定着しているが、実際に好きな色は、人それぞれであるという内容を取り扱っていて、納得しました。たしかに、私だって赤やピンクも好きだけど、青や

水色の方が好きだと感じました。

このように、誰かが勝手に決めたイメージによって、自分らしさを自分の中だけに封印してしまう人がいるのは、不公平ではないかと私も思います。この世界には様々な人がいて、それぞれに個性があるからこそ、みんな楽しく生活できるし、よりよい考え方がうまれたりするのだと私は思っています。だからこそ、その人それぞれの個性は殺してはいけないと思うのです。少しずつでも、男女差別をなくしていく考え方が世界中に広まり、誰もが周りの目を気にせず、自分らしさを大切にして生きていけるようになってほしいと、心から思います。

そのためには、一人一人が意識していかなければならないことがあると思うのです。それは、自分の中の偏見や、イメージをこわすという意識です。人はどうしても常識やイメージ、偏見にとらわれてしまいます。そもそも、常識とは一体何なのでしょうか。よく考えていくと、常識というのは誰が決めたのかも分からず、根拠も何もないものだと分かります。では、そのようなもの、本当に信じて良いのでしょうか。たしかに、ときには常識を考えて行動することは大切です。例えば、高級レストランに行くことになったとします。あなたはパジャマで、その高級レストランに行きますか。こう考えると常識はときには必要だと言えます。しかし、男女差別におきか

えると常識にとらわれてはいけません。その理由は簡単です。誰かが考えた常識には、人々が快適に生活していくうえで必要な常識と、不必要な常識があるからです。必要な常識は、先程の高級レストランの話で分かると思います。不必要な常識というのは、人々が勝手に作りあげた、なくても良いイメージのことです。例えば先程の男女の色についてですが、男子が青で女子が赤というのは人々が生活するうえでなくても良いイメージ、つまり不必要な常識だといえます。

このように常識には、必要な常識と不必要な常識の二種類があることが分かります。必要な常識と、不必要な常識をうまく使い分けていけば、少しは偏見やイメージにとらわれることなく、生活できると思います。そうすれば、男女差別もなくしていけると思うのです。

「私たちの未来は私たちで変えられる。」
このことを忘れないでほしいです。

優秀賞

きつと世界はひとつになるんだ

海老名中学校 二年 吉村 綾真

今、世界のどこかで争いが起きている。数えきれないほどの人々が命を落としている。何もかも武力で解決しなければいけないのか。日々ニュースを見て思う。

僕は、ジョンレノンの平和活動や代表曲の「イマジンを」を知って平和について熟考するようになった。「イマジンの」歌詞の一つに「殺す理由も死ぬ理由も無い」とある。その通りだ。人々を国のために殺す必要はないだろう。当たり前の日々を当たり前のように送り、平和に暮らすことこそ全人類の望みだと考える。

僕の曾祖父は第二次世界大戦の時、徴兵された。食料も水もまともに無い中で戦ったという。これは曾祖父が亡くなって火葬場へ行った時に親戚から聞いた話だ。

その日、初めて戦争の苦しみを実感することになった。納骨をする際の説明で「銃弾」という言葉が耳に入った。十歳だったが今でも鮮明に覚えている。目を遺骨のある方へ向けると直径7ミリほどの黒い球体があった。右膝下あたりに入っていたと知った。

「どうして銃弾があるの？」

祖母に聞いた。

「これはね、戦争中に撃たれて足にずっとあるままだったのよ。」

「とることはできなかつたの？」

「うん。ひいおじいちゃん、すごく痛かつたと思う。」

曾祖父は足の痛みを感じるたびに戦争を思い出していたのではないだろうか。思い出したくない。けど忘れられない。戦争という悲惨な体験した人がいることを僕たちは忘れてはいけないと思う。

平和活動を行っていたジョンレノンは言った。

「もし、全ての人がもう一台テレビを欲しがるかわりに、平和を要求したら、そのとき平和は実現するだろう」と。戦争の苦しみや平和の重要さを知る前の自分はテレビを求めた。しかし今は違う。平和だ。全ての人が平和を求めめることは難しいかもしれない。だが不可能ではない。今、争いをしてる人たちにこのジョンレノンの言葉が届いて欲しいと心から思う。紀元前の世の中から現代まで争いは続いている。争いをしてる人達も決して平和に生活したくないとは考えていない。

僕は今、毎日が幸せで平和だ。勉強もできて御飯もたくさん食べることができている。しかし、争いによって幸せな生活が失われた人がたくさんいる。人間誰にだっ

て、今を生きる権利がある。それを全世界が改めて理解して尊重すべきだと僕は思う。武器を捨て、全ての人が平和を求めろ。そして、皆が皆を家族だと思え、願い続ける。そうすれば、そう。きっと世界はひとつになるんだ。



優秀賞

「生きづらさ」

海西中学校 三年 宇土澤 美砂

「自閉スペクトラム症」。人と人とのコミュニケーションのあり方に疑問を抱いていたときにこの言葉を知り、興味を持ちました。言葉や身振りで相手の考えを読み取ったり、自分の気持ちを伝えることが苦手で日常生活においてコミュニケーションで支障が出たり、独自の強いこだわりを持っている障がいや発達障害です。発達障がいの中のひとつであり、ASDや自閉症といった言葉で表されることもあります。近頃は、障害者差別というものとはタブー視され、差別らしい差別はほとんど無いように見えます。障がいというと、身体障がいと精神障がいに分けられますが、自閉症は私自身や身の回りの人たちと重なり、他人事ではないように思いました。

社会の授業でバリアフリーという言葉を知り、最近では日常生活でも耳にする事が増えてきました。障壁や壁を取り除く意味で使われており、実際にノンステップバスなどが例に挙げられます。そういった面では近年は障がいのある方にも優しい社会づくりが進められていると思

います。ですが、私は疑問に思った事がありました。身体的なサポートは十分なされているけれど、精神面ではどうなのだろう。

身体障がいとは別に、精神障がいや心の病気と呼ばれるものは専門の心療内科や精神科を受診するケースが多いです。また、人それぞれ程度が大幅に違うこともあり、生活に大きな支障が出てしまう人もいれば、多少は手助けが必要でも日常生活を送る分には問題ない人、などの様々な人がいます。そういった、中々理解されにくい精神的な面で生きにくさを感じている人たちは身体障がいのある方よりもっと身近にいて、思っているよりも私たちの生活の中でひっそりと問題を抱え込んでいることが多いと私は思います。

私は小学校の頃に、学校生活では集団行動が強調され、それができない者はおかしいとされる風潮に違和感を抱いたことがあります。たしかにみんな協力することはとても大切ですが、それがうまく出来ない人たちはそれだけで異端な存在だと扱われるのは悲しいことだと思います。そういった小さな事の連続で当事者本人は追い詰められていき、他人と違う自分を恨むようになりま

す。無理に適合しようとするストレスからうつ病を併発してしまふ人もいます。障がいや生きづらさを抱えている人たちへ特別扱いをしようと言っている訳ではあ

りません。私は、生きづらさや悩みはみんな何かしら抱えているものだと思います。障がいの有無は関係なく全員が生きやすい世の中になってほしいと思っていますので

す。
インターネットなどを見てみると、自閉症を患っている人は他者よりも飛び抜けて優れた才能を持つ人が多い、というのをよく目にします。実際に私も、自閉症でありながらも評価された芸術家を知っています。ですが、社会的な生活を送る上での障がいと、その人の才能や感じ方の細部までが障がいだと認定されてしまったのは個性が死んでしまう。そう思いました。これは自閉症などの障がいに限った話ではありません。友人、家族、そもそも集団生活のなかで誰ひとり悲しい思いをする人などいて良いはずがないのです。

ぶつかり合ってしまうことはあれど、自分と違った特性を持つ人を奇異な目で見るのではなく尊重するべきだと思ふのです。自分と全く違えば慣れるまでに時間がかかるのも当然だし、実際、私も今すぐ完璧に理解して、偏見さえ取っ払って生きる事はできません。けれど、これから生きていく上で、少なくとも自分の周りの人たちだけでも、他者との違いで生まれる生きづらさを取り除きたいと思いました。



優秀賞

「人権の守り方って難しい」

海西中学校 三年 大山 琴

この世の中には多くの人々が暮らしています。そして、一人も同じ人は存在しません。性格、外見、性別、出身地など全ての人がそれぞれ違います。それをどうやって尊重するのか、どうやって守るのか色々な人が考えてきて、これからも私たちが考えていくでしょう。私の思う人権の守り方を述べます。

私の伯父は八年前に頭を打って身体障がい者になりました。それまでは、会話したり、歩いたり、車を運転したり、といわゆる普通にスムーズに行っていました。しかし、電話でも会って話しても伯父の言っていることは聞き取りづらく、歩く時には一歩、一歩、とてもゆっくりに、車の運転もできる状態ではありませんでした。あれ、何でだろう。身近でそんなことが起こるなんて考えもしませんでした。悲しむのか、生きていることを喜ぶのか。答えは簡単、生きていることを喜べばそれで良かったのです。しかし、そう簡単にはいきませんでした。伯父は、頭を打ったので、夜中、何時に起きようが、起

きた時間が朝なのです。祖母が「今日は、お店は休みだよ。」と伝えても行くことと決めたら着くまで満足できなかったのです。私はその話を聞き、驚くばかりでした。しかし、伯父はリハビリを重ねていき、少し回復していきました。話してみても伝えたいことが理解でき、歩く動作もスムーズになりました。さらに、積極的に障がい者を雇っている会社で働くようになりました。医師の方も「奇跡」と言っていたほどです。それでも回復するのは簡単ではなく、とても難しく大変なことだったと思います。でも、それは一人の人間として、一生懸命に生きる他の人と変わらない姿だったのだと思います。伯父は、障がい者としてではなく人としてその人生にどんなことを思っていたのかは分かりませんが楽しかった、幸せだったと思ってくれていればいいなと思います。五十年という短いような長いような、でもやっぱり短いような時間、伯父は立派に生きていたと思います。今年の五月、伯父は他界しました。

私は伯父のことをかわいそうだと思ってしまったことがあります。今までできていたことができなくなる、気持ちや行動がコントロールできなくなってしまう、辛くて大変だと思います。しかし、伯父はかわいそうではありませんでした。一生懸命に生きた、それだけで充分でした。「障がい者の人ってなんだか怖い」そう言っている

人を見たことがあります。とてもとても悲しく残念な気持ちと同時に悔しさが溢れました。この人は何を言っているのか。あなたは一生懸命に生きている人を見たことがないのか。何も知らないだけなんだ。どうか、そんなことを言わないでください。傷つく人が、悲しむ人がいます。きつとあなたも知ってくれば自分の言ったことの重さが理解できるはずです。後悔するはずです。私はその一言がずっと心に残っています。そして、これからも忘れることはないでしょう。その一言で伯父の「懸命に生きた尊ぶべき時間」はあなたの中で「怖い」の二字に変えられてしまう。ごめんなさい。私がきちんとして「頑張っている人がいます」と伝えていれば、そんなこと言わなくて済んだのでしょうか。今度はもつと伝えます。だから、もつと知ってください。色んな人がいることを。

伯父の他にも、もつと色んな人たちがそれぞれの場所で一生懸命に頑張っているのだと思います。その頑張っている人たちは私は応援したい。自信を持って伝えたい。一生懸命な人を馬鹿にしたり、笑ったりする権利なんてどこにもないのです。何か自分と違うからって怖がる必要も、分けて差別する必要もあるわけではない。しっかりと一人の人間としてお互いを知ってほしい。そしてお互いに認め合いたい。守られていない人はいないから。どうか絶対に一度考えてみてから発言してください。その一言

は頑張っている他の人を傷つけないのか。私の勝手なお願いになってしまいますが、自分のことだけでなく人のことも守ってください。



優秀賞

差別と理解

柏ヶ谷中学校 匿名

私は日本と韓国のハーフです。このことを初めて教えられたのは、私が小学校5年生のときでした。当時、私のクラスでは韓国アイドルが流行していたため、私は自分ハーフであることを、とても誇りに思いました。しかし、親は私の気持ちとは裏腹に、悩んでそうなどとても複雑な顔をしていました。なぜそんな顔をしているのかとても不思議でした。

その答えを知ったのは、中学校に入ってからでした。社会の授業で韓国と日本の関係を学んだ私に母は、韓国人である父の話をしてくれました。予想していた通り、父、そして私の祖父も韓国人という理由で昔から差別を受けていました。覚悟はしていたけれど、とてもショックでした。なぜ同じ地球に住む人間同士なのに、その間で差別をするのか、話しをしたとき私の頭の中にはそれしかありませんでした。韓国の文化や食べ物好きだと言って日本に取り入れるのに、韓国人への差別はするのとか、と怒りよりも矛盾だらけの日本に疑問だけが次々と

うかび上がりました。そこで、私はインターネットで日本と韓国の関係をもう一度しっかり知る必要があると思いい、インターネットを使い、調べました。

なぜ韓国人が差別されるのか、どういう差別を受けてきたのか、色々調べているうちに一つの答えにたどり着きました。それは「理解」です。お互いを理解してないからこそ差別がおこるのだと私は考えました。

現に、私は今まで「日本人は韓国人を差別している」と一部の人しかしていません。それを、日本人全体をまとめた言い方をしてしまいました。それに、韓国人にも日本人を差別している人もいました。このように理解をしていないことは他の人への偏見や差別につながります。

では、どうやって理解すればいいのか。難しく考える必要はないと思います。わからない問題があったとき、どうやってその問題を解いたでしょうか。全く知らない人と、どうやって友達になったのでしょうか。問題なら解き方を、友達ならその人のことを、よく知ろうとします。知らないことを理解することはできません。

理解することは、知ることの延長戦だと私は思っています。それは差別でも同じです。その人のことをよく知らないから偏見ができ、差別に発展していきます。完全な理解は難しくとも、同じ人間です。必ずどこか理解できる部分が見つかるはず。お互いを理解し合い、温

かい心と笑顔であふれる世界になってほしいです。

私は今でも日本と韓国のハーフであることを誇りに思っています。日本と韓国両方の文化を持つ、そんな私にしかできないことがあると思います。自分に自信を持って、国際理解のために私ができることを精一杯やっています。



優秀賞

「常識」と「自分らしさ」

柏ヶ谷中学校 匿名

LGBTという言葉をどの位知っていますか。LGBTのLはレズビアン（女性同性愛者）Gはゲイ（男性同性愛者）、Bはバイセクシャル（両性愛者）、Tはトランスジェンダー（性同一性障がいを含む性別越境者）を意味しています。このような方々は社会の中で差別を受けたり、人権を侵がいされ様々な攻撃の標的にされるといふ実態があります。私の知人にも同性とお付き合いしていた方がいたのですが、その方は周りから好奇の目にさらされたり、「気持ち悪い。」

と言われた経験があったそうです。

私はこのようなことは決してあってはならないと思います。自分の性別であったり、恋愛の対象は人それぞれであり、他の人に否定されるべきではないからです。

社会の中で恋愛は異性と行うのが当たり前、男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくという考えは今も根強く残っており、それが「普通」「常識」と考えている

人は少なくありません。「非難するつもりはない」と言っても実際に友達や家族、自分の子どもにもLGBTのカミングアウトをされると意見が変わったり見る目が変わったという人もいます。これは社会の中でLGBTについての理解や認知が浅いことからなるのではないのでしょうか。

またLGBTについて調べていると何気ない言葉が人を傷つけているかもしれないということが分かりました。例えば、友だち同士の会話で女性に対して恋人がいるか質問するとき、

「彼氏いるの？」

と聞いたり、同様に男性に対して質問するとき、

「彼女いるの？」

と聞くなど相手の身体の性別で物事を言ってしまう、いっつの間にか人を傷つけているということがあるかもしれません。これはあくまで一例でしたがこのような無意識な発言が、LGBTの方を傷つけているかもしれないと考えたら、これもまた、たくさんの人が知るべきであり、考えた方がよいことだと思いました。

誰もが生きやすい社会にいくために、みんな同じじゃないということや「普通」なんて言葉はないということを知ることが大切だと思います。「これが普通」という考え方や「常識」という枠にとらわれすぎてしまうか

らLGBTの方を見たとき、「普通じゃない」と考え攻撃をし、人権を侵がいてしまうのではないでしょうか。今まで自分達が考えた「普通」は自分や社会全体が見つめ直したり考えたりするべきであり「普通」は全員共通するとは限らないことをもっと知るべきです。ですが、それでもLGBTについて苦手意識を持ってしまう人はいると思います。その時は、理解することは難しくても受け入れたり、頭ごなしに否定しないことが大切だと思います。世の中には様々な人がいて、まったく同じ人はいません。そのため価値観や好み、考え方も十人十色です。だからこそ、互いの意見や好みを認め合い、違う意見も尊重し受け入れることがこれからの社会に必要なだと私は思っています。



優秀賞

人権を侵すネット投稿

柏ヶ谷中学校 匿名

インターネットはとても便利なものです。分からないことをいち早く知ることができる一番身近なツールです。それに世の中に自分をアピールすることができるツールでもあります。

その便利なツールを多種多様な人々が日々利用します。十人十色という言葉があるように画面に表示された情報をどう解釈するかも様々です。

SNSによる誹謗中傷によって心を病み、自死を選択してしまったというニュースをよく目にします。私はそのニュースを聞いたときに心が痛みます。というのも、私自身辛い経験をしたことがあるからです。

私は小学生の時に、友達トラブルにありました。その子となかなか分かり合えず、結局私はその子から距離をとることを選択しました。それから少しの間、平穏な日が続きました。でも、だんだんと周りの子たちが私をあからさまに避けたりするようになりました。私が教室の中で歩いていると、ぶつからないように大袈裟によけた

りするのです。私のことを横目で見ながら、ひそひそと話をすることもありました。私は訳が分からず、辛くてたまらなかつたけれど学校に問い続けました。

そしてある時、その子がSNSで根も葉もない嘘の情報を流していることを聞いたのです。内容は私がその子を虐めているというものでした。

それを聞いて、やつと疑問に思っていた答えを知ることができました。でもそれと同時に怖くて仕方なくなりました。周りの人は、私のことを「そういう人」「ヤバイやつ」なんだと思っているのでは、と大きな不安を抱えるようになりました。

情報はどんどん拡散していきます。私にはそれを止める方法が分かりませんでした。それに悪いことに、人のマイナスな情報って拡散しやすいものです。例えば、それが間違った情報だとしても信じてしまいがちです。

私は周りの人が全員怖くなりました。昨日までなんとも思わなかったことが、今日からはまるで違う世界に入り込んだように全てが違って、恐ろしくみえました。

人の目線や、ちよつとした言葉、態度が私を切り裂いていくような感覚でした。

でもそんな辛い毎日でも、学校に通い続けることができたのは、変わらず接してくれた親友がいたからです。私はその親友に、この悩みを打ち明けるとはありませ

んでした。でも、その親友はSNSを見ているはずなのに何も変わらないでいてくれました。それは私のことを信じてくれていたことと、その情報が間違ったものであると考えてくれたからです。私はその親友にとっても救われました。

もし、私にそういう親友がなくて、周囲の人たちはみんな「敵」になっていたら、学校には到底行けなくなっていたと思います。

インターネット、SNSには多くの情報が日々更新されています。その情報のどれだけが真実であるのか、それを見極める能力、リテラシーを高めることは、インターネットを利用する人全員に求められていると思います。偽りの情報で踊らされて、誰かを傷つける可能性は誰にでもあります。インターネットは顔が見えない分、鋭い言葉で人を傷つける手段にもなり得ます。その人の人権を簡単に傷つけることのできるツールになってしまいうのです。

学校で、「家の玄関に貼ることができないようなことはインターネット、SNSに書き込んではいけません」と教わりました。それは本当にその通りだと思います。汚い言葉遣いや、人を貶めるような書き込みは決してやるべきではないと私は考えます。

「表現の自由」は憲法で認められた権利です。十人十

色の社会ではあるけれど、その表現を発信する前に、一度読み返してみたらいいと思います。それが自分へ投げかけられたらどう思うか、その情報を受け取った人がどう思うかを考えてみたらいいと思います。

私は毎日スマートフォンでいろんな情報を見ます。これから、ずっとスマートフォンと付き合っていく上で、ネットリテラシーを常に念頭に置きながら、インターネットと付き合っていきたいと思います。

「思いやり」「優しさ」を心に留めながらインターネットを利用する人が増えますように。誹謗中傷や、いわれない情報で辛い、悲しい被害を被る人が少しでも減りますように。さらなる進化をしていくインターネットと共に、人権が守られる社会へと私たちも成長していくことが、早急に求められていると思います。

優秀賞

「顔を見て、言える？」

今泉中学校 三年 石原 綾花

最近、学生がスマホを持つような時代になり、インターネットやSNSで誰もが簡単に情報を手に入れたり連絡をとることができるようになった。普通に使えば便利だが、トラブルの元になってしまうこともある。これは私が中学二年生の時に体験した話だ。

私はいつも登下校の際に私を含めた三人で登下校をしていた。二人のことをそれぞれ友人A、友人Bとしよう。その三人は仲が良く、クラスは違ったが、ラインでもグループを作ってよく話していた。だが、試験の帰りのとき、あることが起きた。定期試験の二日目、試験が終わり友人AとBを待っていると中々こない事に違和感を持った。教室をすぐに出て早い時間から待っているのにこない。学校から出ていく生徒の中を探してもいない。次の日には苦手科目があるから勉強したいけど、置いて行ったら二人になんて言われるか分からない。もしかしたら一人除けものにされてしまうかもしれない。そんな不安がよぎって待つことにした。しかし、いくら待っても

こなかった。学校の門は閉まり、先生にも「早く帰りなさい」と言われてしまった。そう、私は置いて行かれたのだ。勘違いして三十分は待っていただろう。最初からげた箱を見ておけばよかったな・・・という後悔や、先に帰るなら声をかけるか、メモでもげた箱に入れてくれればいいのという友人二人への怒りなどが入り混じった。帰ってからは、翌日の試験のことなど頭になく、ラインで二人を問い詰めた。「なぜ先に帰ったの？」と聞くと、「待っても来なかったから」と返ってきた。でも、その時の私は感情に身を任せて「もう一緒に帰らない」「最悪」などを言ってしまっていた。顔が見えないことを良いことに普段思っていた愚痴も本当は言いたくないことも言っていた。確かに一人にも非があったかもしれないけど、たかが登下校なのにそこまで怒る必要があったのかと今では思う。でも当時の自分は、苦手教科が翌日にあるのに勉強をする時間を取られた、と思ったのだろう。翌日、試験が終わって先生に呼び出された。呼ばれて先生についていくと教室には友人AとBの姿があった。私は昨日の事だとすぐに分かった。確かに怒ったとはいえ自分でも心につつかえていた。いざ二人の顔を見ると、後悔の念に駆られた。何であんな酷い事を言ってしまったのだろう、と。いや正しくは送ってしまったのだろう、だ。先に帰られたから何だというのだ。確かに三十分待

たされたかと思つたら先に帰られていたというのは酷いかもしれない。でも、友人二人のクラスは分かっていたんだからげた箱に行つて、くつがないか確認すれば、別に三十分も来ないものを待つ事は無かつたのではないのか。そしたら、一人で帰つて二人に後でラインで聞いてみれば良かったのかもしれない、と。でも、正直あの時の自分は何に対して怒っているのか分からなかつた。ただ単に置いて行かれた事に怒つていたのかもしれないし、三十分の時間で勉強できたかもしれないことに對してもかもしれないし、自分がちゃんとげた箱を確認しなかつたことに對してもかもしれない。でも、理由が何であるうと大切な友人を傷つけたことは事実で、それは何にも塗りがえられなかつた。自分が傷つけたのにまるで自分が傷つけられたかのように苦しかつた。悲しかつた。二人に悪口を言つてしまった。もう関わってもらえないかもしれない。いや、そうなつてもおかしくない。このことにやつと気付いた。私は二人に謝つた。泣きながら。もう二度と戻らないと思つた。でも二人は、「いいよ」と笑つて許してくれた。その三文字だけで心が軽くなつた気がした。でも、自分がした事は最低だつた。ラインだろうと電話だろうと対面で話していようと何も変わらない。送る前に本当に本人の顔、目を見て言えるか。感情に任せても良い事はない。一度スマホを置いて、頭を

冷やして本人に直接言えるのか考えてみてはどうだろうか。

SNSが身近な今、私のようなトラブルを起こす人も少なくないと思う。だから今一度、ラインを誰かに送る時、自分の頭の中でこの言葉を思い浮かべて欲しい。

「顔をみて、言える？」と。



優秀賞

変わらないまま

今泉中学校 三年 島仲 琉璃

いつも通りのまま、変わらないまままでいてくれる。たったそれだけで人が救われることがあるのだ。

私は、自分の性別を定めかねている。身体的には女性の特徴を持っているのだが、男も女もそれ以外も、ピンとくる性別がないのだ。こういう風に自分の性別について考えると、必ずといっていいほど思い出す出来事がある。

中学1年生のころの私は、自分の性別について悩んでいた。わからないのがどうしようもなく苦しくて、スクールカウンセラーの先生に相談しに行った。私の話を聞き終えた先生は、考えたのちにこう言った。

「勘違いじゃない？思春期にはよくあることよ。決めるのはまだ早いと思うな。」

と。死角から殴られたような衝撃だった。うまく言葉を受け取ることが出来なくて、家に帰ってやっと自分がショックを受けていることに気がついた。先生の言葉には何の悪意も含まれていなかった。先生は先生なりに私へ

の言葉を紡いでくれたのだ。自分でもなぜ傷ついたのかわからなかった。けれども確かにあの言葉は私の心に深く刺さっていた。

それから何ヶ月か経ち、学校で性的マイノリティに関するリーフレットが配られた。パラパラとめくって、「味方だよ」という言葉が目にとまった。味方だなんて大げさな。まるで敵がいるようではないか。私は、私でいようとするだけで味方を必要としなくてはいけないのだろうか。ぼんやりとそんなことを思った。

そうしてたくさんさんのモヤモヤが私の心を埋め尽くしてしまい、耐えきれなくなつた。自分ではどうにもできなくなつて保健室に行き、自分のことを話した。保健室にいたのは何度か話を聞いてもらったことがある、とても優しい先生だった。言い出そうとしたときに頭をよぎつたのは、スクールカウンセラーの先生からの言葉だった。また傷付いたらどうしよう。そう思ったけど、こらえきれなくなり言葉が滑り出た。

「性別がわからないんです。」
それを聞くと先生は一言

「そうなんだ。」
と言った。それを聞いて安堵のため息が漏れた。そして嬉しいという感情が体中を駆け巡った。同時に、あの時なぜ傷ついたかもわかった。自分のことを否定されたよ

うに感じて悲しかったのだ。私が欲しかったのは敵でも味方でもなかった。私を救ったのはいつも通りの相槌のような言葉だった。否定されたらやっぱり悲しいし、不自然な寄り添い方も少し傷つく。「へえ、そうなんだ。」と言っていつも通りのままでいてくれた方が、嬉しいことだって、救われることだってある。多くの人と違う部分を打ち明けるのは、誰だって怖いことだと思う。その時に変わらずそのままいてくれることが人の助けになることもあるのだ。

誰しも人と違う部分を少なからず持っている。あまりに多すぎる個性を傷つけないことも、傷つかないことも難しいだろう。だけどその違う部分に悩んで、話してくれる人がいたら、いつも通りの私の言葉で安心させられたらいいな。



優秀賞

「自分を愛する権利がある。」

今泉中学校 三年 村山 りく

初めに、私達が今生きている世界には、個性というものがありません。この文を読んでいる方は個性とはどんなものだと考えますか？私が考える個性は「自分が自分である事」だと考えています。これを踏まえたうえで私達が住む世界に視点を置いてみてください。

「あなたは、自分らしく生きていますか？」

もちろん、自分らしく生きていますか？
もちろん、自分らしく生きていますか？

私は前、色々な方々に「個性的だね。」と言われていました。それは私が流行のファッションよりも自分の着たい服を着たり身につけていたからだだと思います。私は自分の好きなようにしている時が一番、自分が好きで愛する事ができます。ですが、最近では、「個性的だね。」と言われる事も減りましたし、周りの反応が気になるばかり、なぜ生きる必要があるのかという事も考えるようになってしまいました。

私が変わった理由はおそらく一つだけ。

それは私が、ADHD（注意欠陥、多動障がい）の気質があると分かったからです。私の場合、幸い重度ではないので普通に生活はできています。ですが、提出期限を守れない事があったり大半の人より忘れっぽかったりという事があります。私でこれだけ生きづらさを感じているのだから、生まれつき、体の一部が変形していたり機能しない方など属に言う障がいのある方は私の何百倍も生きづらさを感じたり辛い思いをしていると思います。そして、このような人の事を多くの人が、「あの子は普通の人じゃない。」と思うでしょう。

ですが、少し考えてみてください。普通の人って誰が基準になっているのですか？普通の人ってどんな人の事なのでしょうか？これは、障がいには限りません。ファッションや体形もそうです。「あの子はダサイ。」それは、単にあなたとの服の好みの基準が違うだけです。「あの子はブサイク。」それもあなたの顔の好みとその顔が違っただけです。世の中には、その子の顔が良いと思う人もいます。あの子はデブだ。」確かに健康に支障をきたすほどなら痩せるべきでしょう。ですが、それ以外は誰がデブはみにくいなどと決めたのでしょうか。海外には痩せている人よりも肉付きの良い体の方が好まれる国もあるそうですよ。

ここで私が思う事はただ一つです。この世の中、多く

の人が周りに流されています。

「あの子は普通じゃない。」普通とはなんですか？「自分とは違う。」そんなのは当たり前前の事です。だってこの世には絶対に自分と同じ人は存在しないのですから。

それを踏まえて周りを見てみてください。今でもあの人は変だとも思いませんか？

それもその人のすばらしい「個性」だとは思いませんか？

この世の中で「あの子は変な人だ」って思っても良いのは人の人生を平気で奪って、人に侮辱的な事を簡単に言える人だけです。

最後に、この文の内容をまとめると、私たちは自分を愛し、自分は、あの子でもその子でもない、紛れもないただ一人自分なのだから、自分らしく生きてほしいと私は願っています。

そして自分の欠点でさえも、欠点とは思わず個性として自分を見てください。「僕、私、あの子は障がいがある。」それは、障がいではなくて個性です。そんな個性がある自分でさえも、今すぐでは無くても、いつかは愛せるようになってほしいです。私も、がんばります。何度も言うようにはなりますが、この世に普通はありません。この世に生きるすべての人が自分だけの個性をもっていて、特別なことから自分を愛してください。

「自分を愛する権利がある。」この文のタイトルです。自分の個性を大切に、また、周りの人のこういふところや、あんなところ、とつても素敵な個性だなんてこの世のみんなが、思えるようになったら良いなって思います。私はこの文を書いた事によって今までは、見えてこなかった新たな発見もあり、周りの人の見方が変わりました。

なので、この文が、いつか、どこかで、誰かの役に立つ事を心から願っております。自分を愛し、自分らしく生きるために。



優秀賞

ごめんねお兄ちゃん

今泉中学校 三年 横溝 希空

「ADHD」と聞くと皆さんは、どのような印象を持つでしょうか。そもそもADHDとは発達障がいの一で集中力や落ち着きがなく、思い付きで行動してしまうといった症状がみられます。

私には、ひとつ上のお兄ちゃんがいます。お兄ちゃんは小さい頃に、ADHDと診断されました。小学生になり、授業中勝手に教室を出ていたり、学校以外でも常に動いてる。じっと座って勉強してるところは見たことがありません。私はそんなお兄ちゃんが大嫌いでした。ずっと動いているので私まで疲れるし、ADHDは好きな事に対しては周りの声が聞こえない程集中するので、お兄ちゃんがゲームをしている時は、なにを言っても無反応なのです。そんなお兄ちゃんに文句を言うと親は「ほっときなさい」と、いつも言います。私は話を聞かないと怒られるのになんで……。私だってずっとゲームしたいのに……。ずっと遊びたいのに……。私はもっとお兄ちゃんが嫌いになり、親まで嫌いになりました。

私が中学生になったある日、前の席に座っていた子とよく話すようになりました。その子はすごく明るくて優しく人見知りの私でもすぐ仲良くなれました。その子には大きな夢があり、前向きに夢を追いかけられる真面目な子で私は憧れていました。しかし、その子は勉強が苦手で、授業中も落ち着きがありません。休み時間、楽しくなると廊下を走って怒られたり、先生に敬語が使えなくて怒られたり、私は真面目な子だと思っていたので、すごく複雑な気持ちになりました。そこからもっと仲良くなりどこに行くにも一緒。ある日私がお兄ちゃんの不満をその子にぶつけるようになり、お兄ちゃんがADHDだと伝えた時、その子が「私もADHDだよ。」と言いました。私は最初信じられませんでした。ADHDだったらお兄ちゃんみたいに、嫌いになってるかもしれないけど、その子の事が大好きだった。お兄ちゃんみたいに好きな事に集中しすぎると無反応になることもないのでとても不思議でした。友達がADHDだと知ってから、今までとても複雑だった気持ちがすつとなくなる感じがして、よく怒られることも気にならなくなりました。ADHDであるお兄ちゃんの不満を言ってしまったのでその子を傷付けてしまったと思い、すぐに謝りました。その子は「何も気にしてないよ。」と言ってくれましたが、本当はすごく気にしていたと思います。今でも仲が良くて、

その時のことについて話してくれたのですが、「本当は言
いづらかったし、今でも自分から ADHD だとは言えな
い。」と言っていました。

その事があってから私は、今までお兄ちゃんの不満を
言っていたことをすごく後悔しました。今思えば、発達
障がいについて理解しようともせず、障がいのある方に
暴言や差別的な言葉を言っていたのです。その差別のせ
いで少しでも傷付いている人がいるということに気付い
た私は、障がい者に対しての考え方が変わりました。

世界には、障がい者への差別以外にも肌の色、性、言
語や宗教など、たくさん差別があります。自分は差別
していないと思っても振り返ってみると無意識のう
ちにしてしまっていることがあります。世界中にはたく
さんの人がいて自分と全く同じ人はぜったいに居ませ
ん。必ずみんなどこか違う所があります。例えば、二重
の人に「いいなあ、二重ってかわいいよね。」と言ったと
します。二重の人はほめられましたが、よく考えると、
一重や奥二重の人はかわいくないということでしょう
か。一重や奥二重の人からするとそう聞こえるかもしれ
ません。そんな無意識にしてしまう差別のせいで傷付い
ている人がいるということを理解して欲しい。そんな差
別をなくしようと、世界では問題解決への取り組みがされ
ています。差別をなくすために私たちができることは、

差別について深く知り、正しい認識を持ち、問題解決へ
の取り組みに協力することです。

この世の中から差別がなくなり、世界中の一人ひとり
が常に笑顔で過ごせる日が来ることを願って。一人でも
多くの方が救われますように。



◆ ポスター部門



市長賞

ネットの書き込み

柏ヶ谷中学校 三年 後藤 来実



優秀賞

肌の色

柏ヶ谷中学校 三年 浦井 かつろ



優秀賞

いじめから

柏ヶ谷中学校 三年 藤本 葵衣





柏ヶ谷中学校 三年 鈴木 宇海



柏ヶ谷中学校 三年 斉藤 美優



市ホームページで
人権情報発信中です！



人権イメージキャラクター 人KENまもる君

人KENあゆみちゃん



優秀賞
柏ヶ谷中学校
三年
藤本 葵衣



優秀賞
柏ヶ谷中学校
三年
浦井 かつろ

令和4年度海老名市中学生
人権作文・ポスター優秀作品集
令和4年12月発行

編集発行 海老名市 市民協働部 市民相談課
人権男女共同参画係
海老名市勝瀬 175 番地の1
電話 046-235-4568